鹿 病 防 ３９ 号
令和８年 11 月 26 日

各関係機関の長　殿

鹿児島県病害虫防除所長

令和８年度病害虫発生予察情報について

このことについて、発生予報第９号（12 月）を発表したので送付します。

鹿 児 島 県 病 害 虫 防 除 所

〒899-3401
南さつま市金峰町大野 2200
TEL:099-245-1081（代表）
099-245-1157（直通）
FAX:099-245-1149

ホームページアドレス：https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujosho/index.html

メ ー ル ア ド レ ス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

１.使用する人の安全	使用者自身の健康管理、安全使用
２.作物に対する安全	適期、適正防除で薬害防止
３.農産物に対する安全	消費者へ安全な農産物を供給 （農薬安全使用基準の遵守）
４.環境に対する安全	周辺環境への影響防止 （周辺住民等への危被害防止） （河川、湖沼、海等への汚染防止） （養蚕、養蜂等への危被害防止）
５.保管管理の安全	保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

令和８年度 病害虫発生予報　第９号

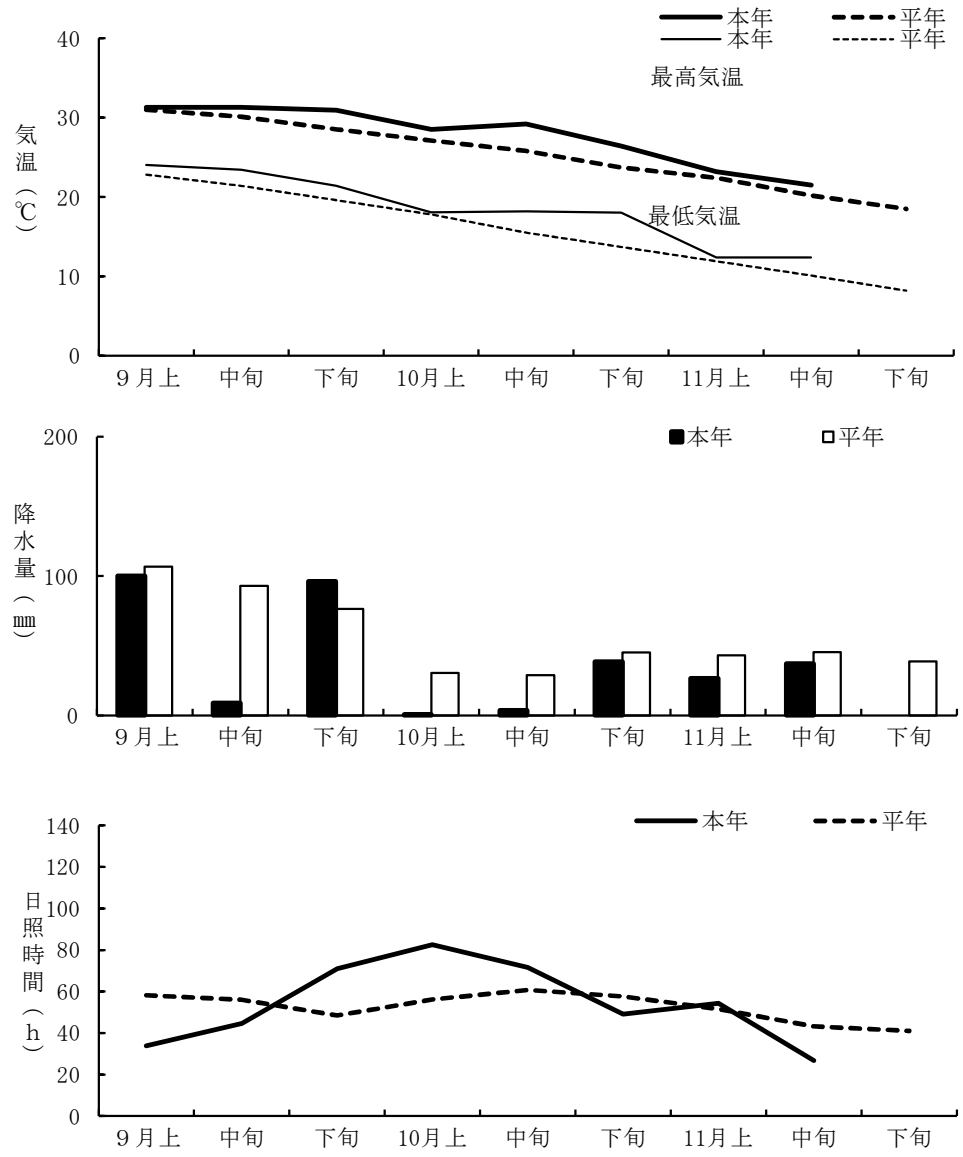
令 和 ８ 年 11 月 26 日
鹿児島県病害虫防除所

【気　象　概　況】

Ⅰ．向こう１か月の予報（11 月 21 日～12 月 20 日）　令和８年 11 月 19 日　鹿児島地方気象台発表

要素	地域	確率（%）			概要
		低い(少ない)	平　年　並	高い(多い)	
気　　温	九　州　南　部	１０	４０	５０	九州南部、奄美地方ともに気温は高く、降水量と日照時間はほぼ平年並みの見込み。
	奄　美　地　方	２０	３０	５０	
降 水 量	九　州　南　部	３０	４０	３０	
	奄　美　地　方	３０	３０	４０	
日照時間	九　州　南　部	３０	３０	４０	
	奄　美　地　方	３０	４０	３０	

Ⅱ．９～11 月の気象情報（鹿児島地方気象台　観測点：加世田）



【 病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要 】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
野菜	キュウリ	うどんこ病	並	並
		アザミウマ類	やや多	多
		コナジラミ類	並	やや多
	トマト	うどんこ病	やや多	やや多
		黄化葉巻病	やや少	並
		コナジラミ類	多	多
	ピーマン	うどんこ病	やや多	やや多
		アザミウマ類	多	多
		タバココナジラミ	多	多
	イチゴ	うどんこ病	少	少
		アザミウマ類	多	多
		ハダニ類	やや多	多
	キャベツ	菌核病	やや少	やや少
		コナガ	並	やや多
	エンドウ類	褐紋病・褐斑病	並	並
		うどんこ病	並	並
		アザミウマ類	やや少	並
花き	キク（施設）	ハダニ類（県本土、施設）	並	やや多
		〃　（奄美地域、露地）	並	やや多
		アザミウマ類（県本土、施設）	やや多	多
		〃　（奄美地域、露地）	少	やや少

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

Ⅰ．普通作物

防除に関する今月の留意事項

１．水稲

（１）スクミリンゴガイ（令和８年度技術情報第 19 号、令和８年 11 月 20 日付参照）

発生ほ場では、水田と水路内での越冬個体を減らすために、以下の防除対策を行う。

ア　冬期にトラクターでほ場を耕耘（走行速度を遅く、ロータリーの回転は速くする）して、土壌中の貝を寒風にさらすとともに破砕する。

イ　水路内での越冬場所をなくし、越冬個体を寒風にさらすため、水路の泥上げを地域全体で行う。

２．サツマイモ

（１）サツマイモ基腐病

次作の発病リスクを軽減するために、以下の防除対策を徹底する。

＜種いも＞（健全種いもの確保と消毒）

ア　発病ほ場から収穫した塊根を種いもに利用すると、貯蔵中に発病するため、必ず健全ほ場から種いもを確保する。

イ　貯蔵中の発病リスクを減らすため、貯蔵前に流水で水洗・選別して、なり首と尾部を切除する。その上で、トップジンM水和剤で消毒し、十分に風乾させる。蒸熱処理については農研機構のマニュアルに従い適切に行う。なお、蒸熱処理直後の種いもの表皮は柔らかいので、傷をつけないよう、丁寧に取り扱う。風乾後は、適正な温度と湿度を確保できる定温貯蔵庫等で貯蔵する。切除に使用したハサミ等は、こまめに消毒する（火炎滅菌、または丁寧な洗浄と拭き取り）。

ウ　罹病した種いもが同一コンテナ内に混入すると、貯蔵中に健全な種いもへ伝染するため、定期的に種いもの状況を観察し、疑わしい種いもは必ず除去する。

エ　貯蔵前に種いも消毒を行っていない場合は、伏せ込む前に必ず種いも消毒を行う。また、病害が発生した塊根や傷の多い塊根の除去を徹底し、健全な種いものみを土壌消毒した苗床に伏せ込む。

＜育苗床＞（苗床の準備と消毒）

ア　残さをほ場外に持ち出し、適切に処分する。

イ　残さ持ち出し後、複数回耕耘する。

ウ　土壌消毒は、適正な土壌水分の条件下で、殺菌効果のある剤（バスアミド等）で実施し、処理後直ちに必ずビニール等で被覆する。また、消毒後は、ガス抜きを十分に行う。

サツマイモ基腐病の生態と防除に関する詳しい情報は、以下を参照してください。

鹿児島県

サツマイモ基腐病防除対策マニュアル（第４版）令和６年３月改訂

（https://www.pref.kagoshima.jp/ag06/documents/documents/74570_20240315133011-1.pdf）

農研機構

サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和４年度版）

（https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator04.pdf）

Ⅱ．野　菜

１．キュウリ

（１）うどんこ病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

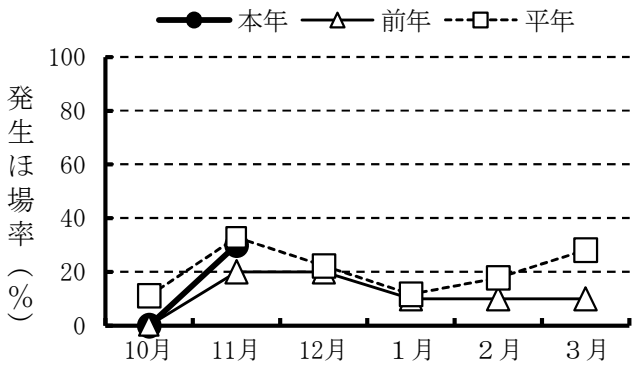
（イ）対象作型　　促成栽培

（ウ）発 生 量　　並

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：並

発生ほ場率 30%（平年 33%）：並



うどんこ病の発生ほ場率（キュウリ）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）多発すると防除が困難になるので、ハウス内の見回りを行い、早期発見と初期防除に努める。

（イ）発病葉は早めに除去し、ハウス外に持ち出して処分する。

（ウ）農薬は、下位葉や葉裏に十分付着するよう散布する。

（エ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（２）アザミウマ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）対象作型　　促成栽培

（ウ）発 生 量　　多

イ　予報の根拠

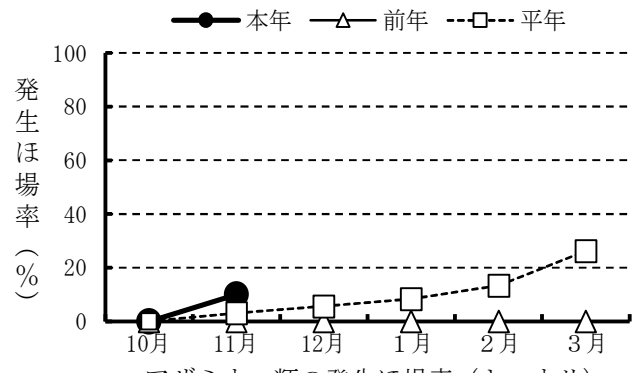
（ア）調査結果　発生量：やや多

発生ほ場率 10%（平年３%）

：やや高い

（イ）気象予報

気温：高い（＋）



アザミウマ類の発生ほ場率（キュウリ）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）アザミウマ類は、キュウリ黄化えそ病（ＭＹＳＶ）を媒介する。ハウス開口部（サイド等）等に粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。

（イ）黄化えそ病の発病株は伝染源となる。ほ場の見回りを行い、発病株を認めたら早急に抜き取り、処分する。

（ウ）天敵を導入しているほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

（エ）農薬は、葉裏にも十分付着するよう散布する。

（オ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（３）コナジラミ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）対象作型　　促成栽培

（ウ）発 生 量　　やや多

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：並

発生ほ場率 30％（平年 20％）
：やや高い
発生程度は低い（－）

（イ）気象予報
気温：高い（＋）

ウ　防除上注意すべき事項

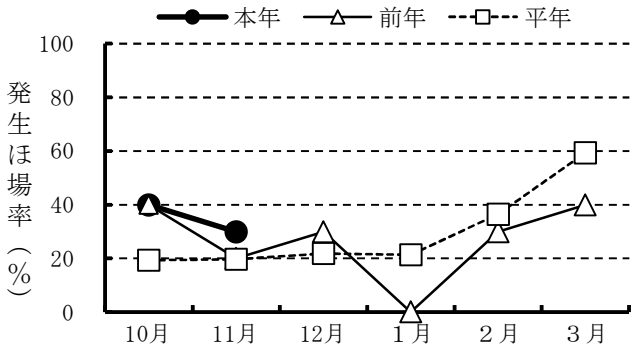
（ア）コナジラミ類は、キュウリの退緑黄化病（ＣＣＹＶ）を媒介する。生育初期に本病が発生すると被害が大きくなるので、黄色粘着トラップを設置して早期発見と早期防除に努める。

（イ）退緑黄化病の発病株は伝染源となる。ほ場の見回りを行い、発病株を認めたら早急に抜き取り、処分する。

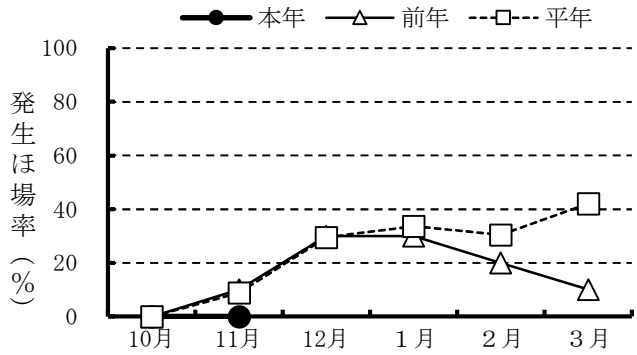
（ウ）天敵を導入しているほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

（エ）農薬は、葉裏に十分付着するよう散布する。

（オ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。



コナジラミ類の発生ほ場率（キュウリ）



（参考）退緑黄化病の発生ほ場率（キュウリ）

２．トマト

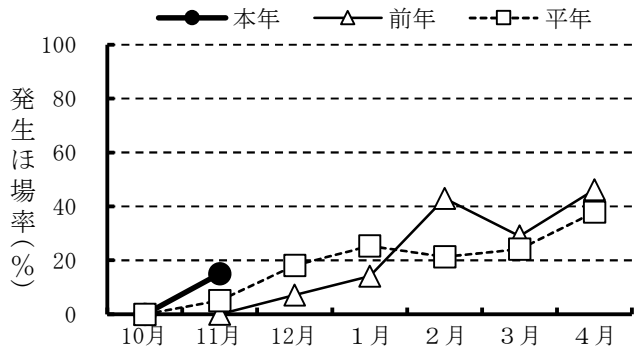
（１）うどんこ病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土
（イ）対象作型　　促成栽培
（ウ）発 生 量　　やや多

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：やや多
発生ほ場率 15％（平年５％）
：高い
発生程度は低い（－）



うどんこ病の発生ほ場率（トマト）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）発病葉は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。

（イ）多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

（ウ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（エ）成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。

（２）黄化葉巻病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土
（イ）対象作型　　促成栽培
（ウ）発 生 量　　並

イ　予報の根拠

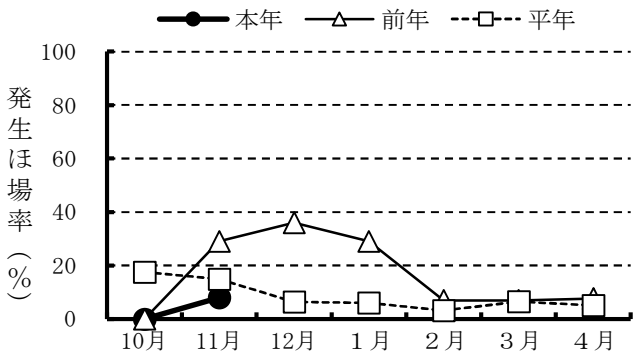
（ア）調査結果　発生量：やや少

発生ほ場率８％（平年 15%）
：やや低い
コナジラミ類の発生が多い（＋）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）黄化葉巻病（ＴＹＬＣＶ）はコナジラミ類によって媒介されるため、コナジラミ類の防除を徹底する。

（イ）発病株は伝染源となるので、ほ場の見回りを行い、発病株を認めたら早急に抜き取り処分する。



黄化葉巻病の発生ほ場率（トマト）

（３）コナジラミ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）対象作型　　促成栽培

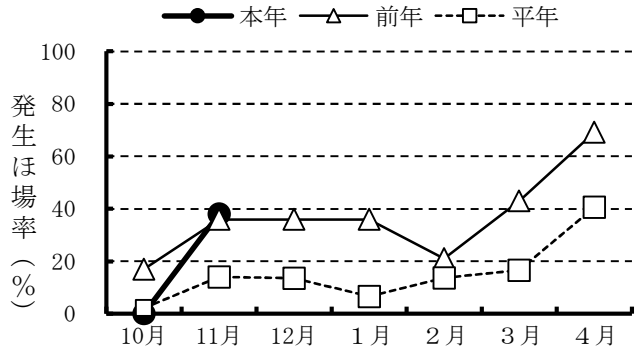
（ウ）発 生 量　　多

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：多

発生ほ場率 38%（平年 14%）：高い

ウ　防除上注意すべき事項



コナジラミ類の発生ほ場率（トマト）

（ア）コナジラミ類は、トマト黄化葉巻病（ＴＹＬＣＶ）を媒介する。生育初期に本病が発生すると被害が大きくなるので、黄色粘着トラップを設置して早期発見と早期防除に努める。

（イ）天敵を導入しているほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

（ウ）農薬は、葉裏に十分付着するよう散布する。

（エ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

３．ピーマン

（１）うどんこ病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）対象作型　　促成栽培

（ウ）発 生 量　　やや多

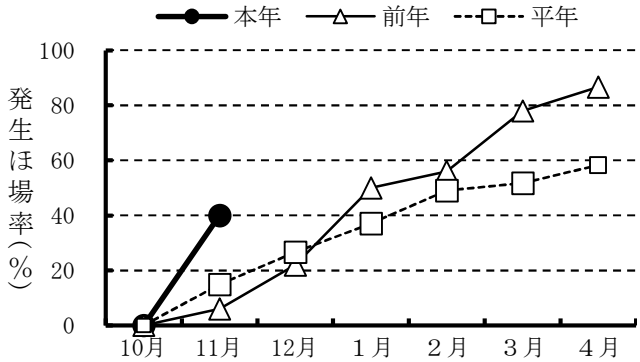
イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：やや多

発生ほ場率 40%（平年 15%）：高い

発生程度は低い（－）

ウ　防除上注意すべき事項



うどんこ病の発生ほ場率（ピーマン）

（ア）多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

（イ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（ウ）成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。

（エ）発病葉は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。

（２）アザミウマ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）対象作型　　促成栽培

（ウ）発 生 量　　多

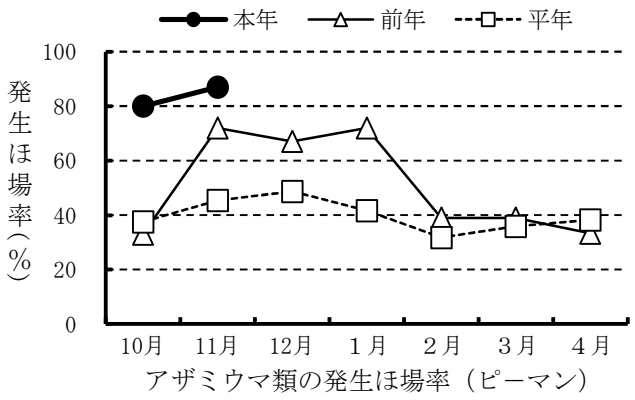
イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：多

発生ほ場率 87%（平年 45%）：高い

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）ハウス開口部（サイド等）等に粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。



アザミウマ類の発生ほ場率（ピーマン）

（イ）花や新芽の中など農薬が付着しにくい場所に生息するので、散布は丁寧に行う。

（ウ）天敵を放飼したほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

（エ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（３）タバココナジラミ

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　多

イ　予報の根拠

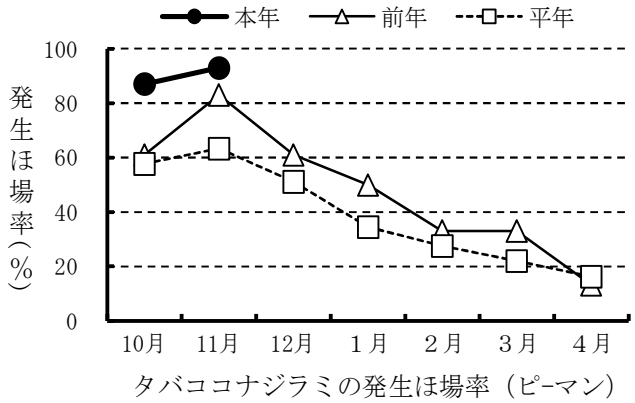
（ア）調査結果　発生量：多

発生ほ場率 93%（平年 63%）

：高い

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）多発するとすす病を発生させるので、黄色粘着トラップを設置して早期発見と早期防除に努める。



タバココナジラミの発生ほ場率（ピーマン）

（イ）天敵を放飼したほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

（ウ）農薬は、葉裏に十分付着するよう散布する。

（エ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

４．イチゴ

（１）うどんこ病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　少

イ　予報の根拠

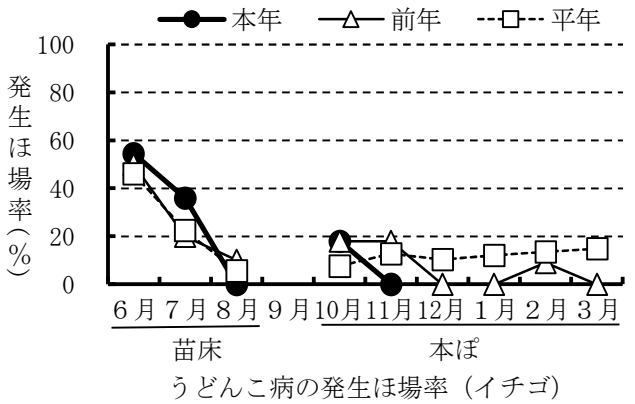
（ア）調査結果　発生量：少

発生ほ場率０%（平年 13%）：低い

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）防除は予防に重点を置く。農薬は、葉裏に十分付着するよう散布する。

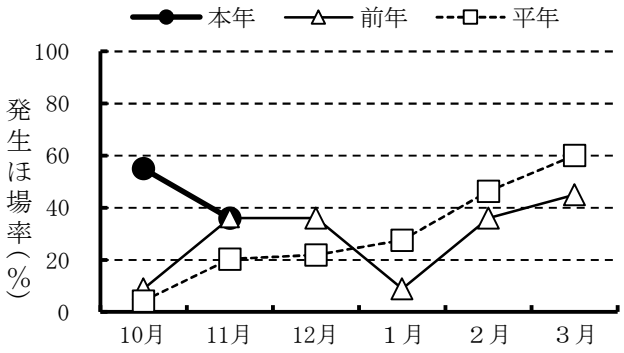
（イ）上位葉に発生しやすいため、葉裏をよく観察し早期発見と初期防除に努める。



うどんこ病の発生ほ場率（イチゴ）

（ウ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。
（エ）発病果や発病葉、古葉は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。
（オ）窒素肥料の過多や葉が混み合うと多発しやすくなるので、適切な栽培管理を行う。

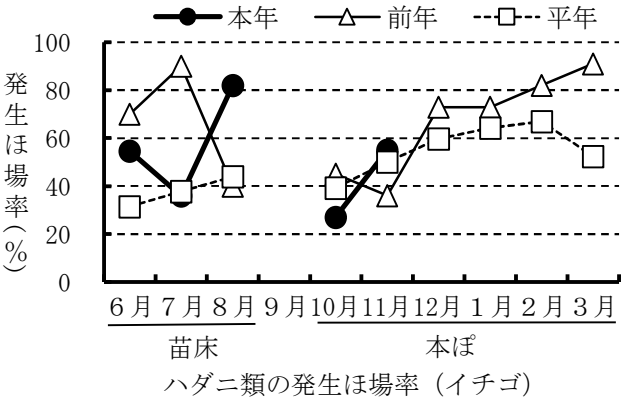
（２）アザミウマ類
ア　予報内容
（ア）発生地域　　県本土
（イ）発 生 量　　多
イ　予報の根拠
（ア）調査結果　発生量：多
発生ほ場率 36％（平年 20％）
：やや高い
発生程度の高いほ場を認めた（＋）
ウ　防除上注意すべき事項
（ア）ハウス開口部（サイド等）等に粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。



アザミウマ類の発生ほ場率（イチゴ）

（イ）花の中など農薬が付着しにくい場所に生息するので、散布は丁寧に行う。
（ウ）天敵を放飼したほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。
（エ）農薬は、葉裏に十分付着するよう散布する。
（オ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。
（カ）農薬によっては感受性が低下しているので、散布後は防除効果を確認する（令和７年度技術情報第 11 号、令和７年７月 31 日付参照）。
（キ）農薬によっては、天敵やミツバチに影響があるため薬剤選定に注意する。

（３）ハダニ類
ア　予報内容
（ア）発生地域　　県本土
（イ）発 生 量　　多
イ　予報の根拠
（ア）調査結果　発生量：やや多
発生ほ場率 55％（平年 50％）：並
発生程度の高いほ場を認めた（＋）
（イ）気象予報
気温：高い（＋）
ウ　防除上注意すべき事項
（ア）天敵を放飼したほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。



ハダニ類の発生ほ場率（イチゴ）

（イ）農薬の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏に十分付着するよう散布する。
（ウ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。
（エ）農薬によっては感受性が低下しているので、散布後は防除効果を確認する。
（オ）農薬によっては、天敵やミツバチに影響があるため薬剤選定に注意する。

5．キャベツ

（1）菌核病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）対象作型　　冬どり

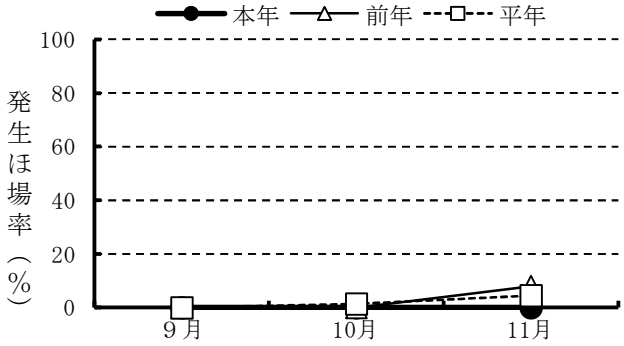
（ウ）発 生 量　　やや少

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：やや少

発生ほ場率０％（平年５％）

：やや低い



菌核病の発生ほ場率（キャベツ：冬どり）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）病原菌は地際部から感染しやすいので、農薬は株元へ十分かかるように散布する。

（イ）発病部位から健全部へ菌糸によって被害が広がるので、発病葉は見つけ次第取り除く。

（ウ）発病株は次作の伝染源となるので、菌核を生じないうちにほ場外に持ち出し処分する。

（エ）収穫終了後の残さは適正に処分する。特に発病残さをほ場に残さない。

（2）コナガ

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）対象作型　　冬どり

（ウ）発 生 量　　やや多

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：並

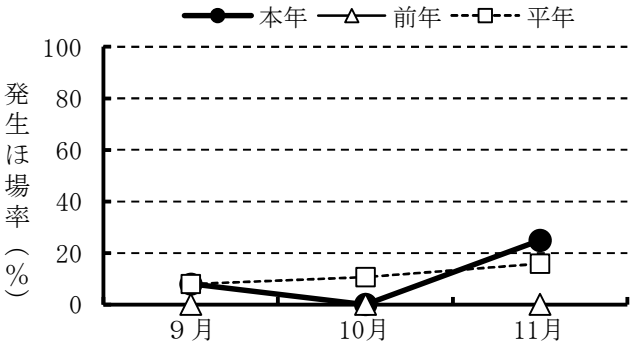
発生ほ場率 25%（平年 13%）

：やや高い

発生程度は低い（－）

（イ）気象予報

気温：高い（＋）



コナガの発生ほ場率（キャベツ：冬どり）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（イ）収穫終了後の茎葉は、次の作型への発生源になるので、速やかにすき込み処分する。

（ウ）冬どり作型で発生が多かった地域では、春どり作型に被害が出やすいので、育苗期～定植時の初期防除に努める。

6．エンドウ類

（1）褐紋病・褐斑病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）対象作型　　冬・春どり

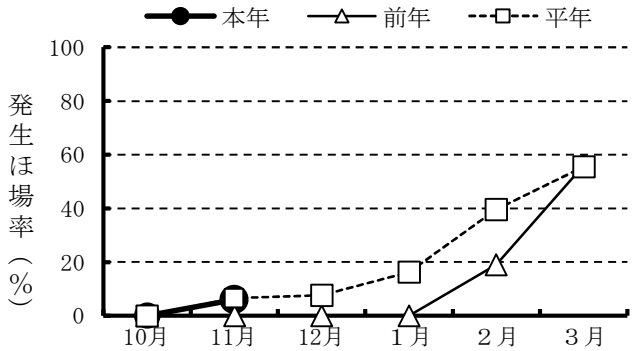
（ウ）発 生 量　　並

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：　並

発生ほ場率６％（平年３％）：やや高い

発生程度は低い（－）



褐紋・褐斑病の発生ほ場率（エンドウ類）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）排水不良のほ場では多発しやすいので、排水対策に努める。

（イ）多発するとごま症の発生につながるため、未発生ほ場では予防散布に努め、既に発生しているほ場では早めに防除を行う。

（ウ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（２）うどんこ病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

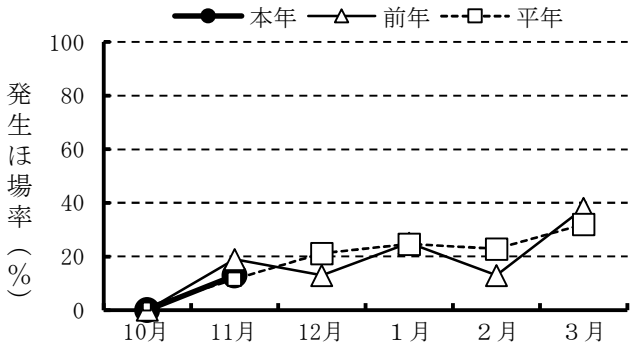
（イ）対象作型　　冬・春どり

（ウ）発 生 量　　並

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：並

発生ほ場率 13%（平年 14%）：並



うどんこ病の発生ほ場率（エンドウ類）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）着花～収穫初期に下葉から発病し、発生初期は汚白色の小斑点から白色の菌叢を生じる。多発するとごま症の発生につながるため、未発生ほ場では予防散布に努め、既に発生しているほ場では早めに防除を行う。

（イ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（３）アザミウマ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）対象作型　　冬・春どり

（ウ）発 生 量　　並

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：やや少

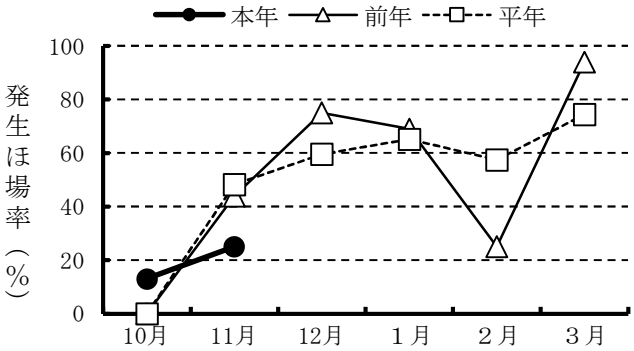
発生ほ場率　25%（平年 49%）

：低い

発生程度の高いほ場を認めた（＋）

（イ）気象予報

気温：高い（＋）



アザミウマ類(被害莢)の発生ほ場率(エンドウ類)

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）エンドウ類に発生する主な種類はハナアザミウマである。若莢に産卵し、「白ぶくれ莢」となるので、若莢の被害や青色粘着トラップへの誘殺から発生状況を把握し、早期防除に努める。

（イ）農薬の付着しにくい花弁の奥や若莢に寄生するので、丁寧な農薬散布に努める。

（ウ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（エ）防虫ネットや障壁植物により侵入を防ぐ。

Ⅲ．花き

１．キク

（１）ハダニ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県内全域

（イ）発 生 量

県 本 土（施設）　やや多

奄美地域（露地）　やや多

イ　予報の根拠

＜県本土（施設）＞

（ア）調査結果　発生量：並

発生ほ場率 30%（平年 30%）：並

（イ）気象予報

気温：高い（＋）

＜奄美地域（露地）＞

（ア）調査結果　発生量：並

発生ほ場率０％（平年４％）：並

（イ）気象予報

気温：高い（＋）

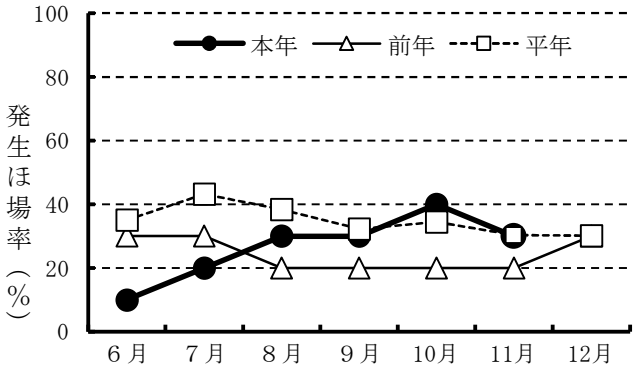
ウ　防除上注意すべき事項

（ア）出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する場合が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

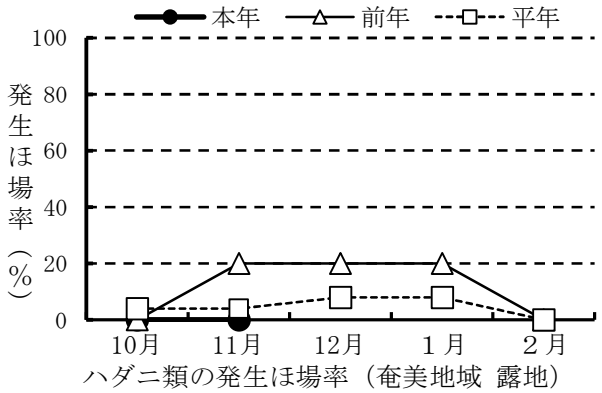
（イ）農薬は、葉裏までよく付着するように散布する。

（ウ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（エ）ほ場内及びその周辺の除草に努める。



ハダニ類の発生ほ場率（県本土 施設）



ハダニ類の発生ほ場率（奄美地域 露地）

※２月の平年値は過去５カ年平

（２）アザミウマ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県内全域

（イ）発 生 量

県 本 土（施設）　多

奄美地域（露地）　やや少

イ　予報の根拠

＜県本土（施設）＞

（ア）調査結果　発生量：やや多

発生ほ場率 40%（平年 35%）：並

発生程度の高いほ場を認めた（＋）

（イ）気象予報

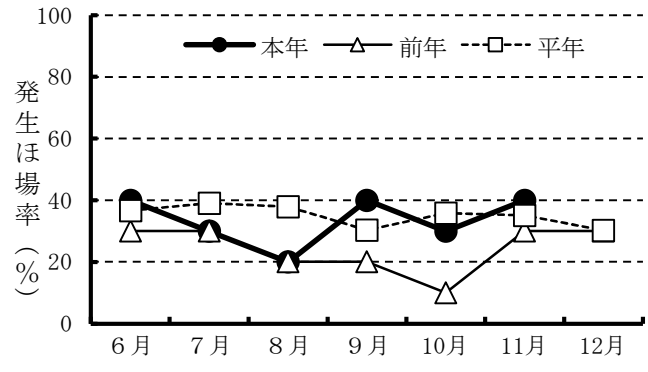
気温：高い（＋）

＜奄美地域（露地）＞

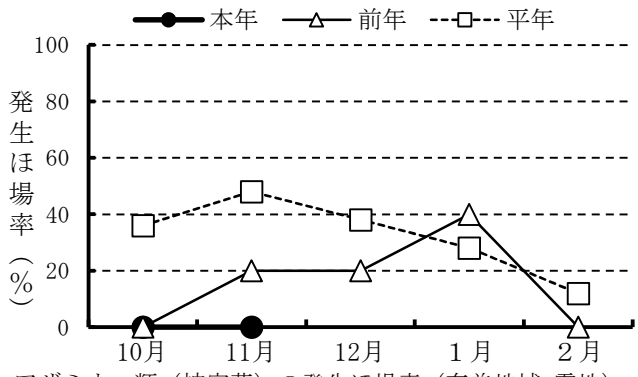
（ア）調査結果　発生量：少

発生ほ場率０％（平年 48%）：低い

（イ）気象予報



アザミウマ類(被害葉)の発生ほ場率（県本土施設）



アザミウマ類（被害葉）の発生ほ場率（奄美地域 露地）

※２月の平年値は過去５カ年平均

気温：高い（＋）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）アザミウマ類（クロゲハナアザミウマを除く）の発生動向を把握するためには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。

（イ）クロゲハナアザミウマは、主に中下位葉に寄生しているため、よく観察して早期発見に努め発生が認められた場合は、農薬が中下位葉の葉裏まで付着するよう丁寧に散布する。

（ウ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

（エ）アザミウマ類は、キクえそ病の病原ウイルス（ＴＳＷＶ）とキク茎えそ病の病原ウイルス（ＣＳＮＶ）を媒介するため、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。

（オ）ほ場内及びその周辺の除草に努める。

（カ）母株や苗は導入時に、アザミウマ類の寄生やウイルス病の発生がないか確認し、持ち込まないようにする。

Ⅳ．果　樹

防除に関する今月の留意事項

１．カンキツの貯蔵病害（青かび病、緑かび病）

収穫時に気温が高く、降雨が多いと腐敗果が発生しやすい。

（１）　ベルクートフロアブルを使用する場合、ベンレート水和剤と混用散布することで防除効果が高まる。なお、ベルクートフロアブルは晩秋から冬にかけての低温期には、固まってしまうので、50℃以上の湯に容器の肩まで浸し、１時間以上経過した後、室温まで放置し、よく振ることで、流動性を高める必要がある。

（２）農薬は収穫予定日を想定し、収穫前日数に注意するなど、使用基準を遵守する。

（３）収穫時には果実に傷をつけないよう手袋を使用し、果梗部の二度切りを丁寧に行なう。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1．使用前にラベルや説明書をよく読む。
　決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2．使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3．散布前には防除器具の整備・点検をする。
4．体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5．散布時には農薬がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6．クロルピクリン剤は、住宅地及び畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で 10 日以上被覆する。
7．毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8．使用期限の切れた農薬、不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9．農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10．農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

○調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
○野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
○調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
○気象予報は、向こう 1 か月の長期予報。
○平年値は原則として過去 10 年間の平均値を使用。